

見直そう！本のある生活

私が小学校へ入学して間もなく、7歳の誕生日を迎えた時のことです。祖父が昆虫図鑑を買ってきてくれました。国内に生息する代表的な虫が細かい標本画で描かれ、小学1年生が持つには少し大き目な本でしたが毎日ランドセルの中に忍ばせては持ち歩き、虫のことなら何でも知っていることを友だちへ自慢するのが嬉しくてたまりませんでした。夜寝る時も眠くなるまで何度も読み返し、夏になるのが待ち遠しかったことを思い出します。

なぜなら、私が住んでいた東京郊外にある武蔵村山市は、今でも電車の通らない街として有名ですが、当時は、木々が生い茂る森があり、虫の宝庫でした。7月になると、子供たちに人気のクワガタムシ、カブトムシそして多種多様なセミが羽化し、虫を捕まえようと網をもって野山を駆け回る子供の姿が多く見られました。プレゼントされた図鑑は、飼育方法や生息地なども記載されており、この本との出会いが私を無類の虫好きにしたことは言うまでもありません。

時は流れて小学4年生の時、「エミールと探偵たち」「怪盗ルパン」「シャーロックホームズ」といった海外の推理小説を好んで読む友達がいました。書評のような感想を難しい言葉で説明する友達の姿は、図鑑と漫画ばかり見ている私にとっては憧れのような存在でした。ある日、この友達の家へ遊びに行くと、本棚に本の表紙カバーがとても綺麗で読まれた形跡がない「怪人二十面相」と書かれた本に気付きました。ページを開くと文字が大きく挿絵もあるのでとても読みやすいと感じ、無理を言って貸してもらいました。ちなみに友達は、キャプテンキッドの財宝を探すエドガー・アラン・ポーの「黄金虫」を勧めてくれたのですが、ライバル心からか丁重に断りました。家に帰って早速読み始めると、ハラハラドキドキの展開に夢中となり、あっという間に読み終えてしまいました。冒頭のフレーズにある「老人にも、若者にも、富豪にも、乞食にも、学者にも、無頼漢にも、女性にも変装する二十面相が国宝級の美術品を盗むことを予告し・・・。」この文章を紹介するだけでも私は当時を思い出し、本をもう一度読みたくなります。以来、私は明智探偵の推理を友達に自慢気に説明するようになりました。

今でも本を読むことは娯楽の一つですが、以前はもっと私たちの生活に読書が密着していました。綴られている文字や文章で表現された情景描写は、視覚的な想像力を掻き立て、登場人物やストーリー展開へ期待を込めることが自由にできました。しかし、今では様々な視覚媒体が発達したため、想像する能力を発揮しなくても、色、音、主人公の感情まで容赦なく視覚に飛び込んできます。常に情報という雑踏の中で生活している私たちは、与えられた僅かな真実を頼りに頭や心の中で自由に思い描くことの楽しさを忘れてしまっているのかも知れません。映像や音の無い世界に入り込める「本のある生活」をあらためて見直してみることも必要なのではないのでしょうか。特に、本を介してのコミュニケーションは、自分とは違う考えを受容できる機会となり、他者を理解するきっかけにもなるに違いありません。

令和6年度一学期の始業式のこと、生徒へ私から「本を読もう！」と呼びかけました。その後、この思いが伝わったのでしょうか、朝の5分を読書の時間としている学年やクラスがあります。ホームルームの始まりを知らせるチャイムと同時に騒々しい朝の教室は、本の世界観に没入する生徒の姿で一瞬にして静けさを取り戻します。

写真や動画でしか伝わらないと思い込んでいた生徒できえも一心不乱に文字を追う姿は、今までとは違う朝のピンと張りつめた空気を漂わせ、学びの匂いとなって学校全体を包み込んでいました。

令和6年7月

